

山に親しみ山に想う(17)

－韓国最高峰・漢拏山に登る(3)－

連載 <文・写真> 岡本

(3)御里牧コース(2005年2月6日、晴れ)

[漢拏山の北西麓より登る比較的易しいコースである。登山者も多いので、初の積雪期登山として御里牧コースを選んだ。無雪期の登り所要時間が2時間のところを、2時間25分という自分としては予想外に順調だったのは、好天のうえ登山路の雪がよく踏み固められて歩き易かったからである。]

「御里牧コース4.7kmは、登山口が標高970mである。今日の最高地点標高1700mまで730mの登高。手持ち地図では、登り2時間だが、雪中登山なので予測がつかなかった。しかし、上手くいった。7時過ぎに家を出て、8時に漢拏山国立公園管理事務所御里牧入口に到着。入山切符売場方向に左折しようとする、係員が上の駐車場は満車なので入口近くに駐車せよと言う。入口の駐車スペースもほぼ満杯。8時10分に駐車した所より入山切符売場まで800m程のセメント道を歩く。途中でアイゼンを装着。8時25分に切符売場に到着。入山料1600ウオン。8時30分に管理事務所の御里牧広場から登山口に入る。コースは踏み固められた雪道なので歩き易い。ザクザクと快い。登山路脇の鉄棒杭の頭が少し出ているだけなので、1m以上の積雪だ。」

[登山口から500m程樹林の中を進むとY溪谷が現れるのだが、雪中で気づかなかったのか、メモしていない。この後、頌徳樹のすぐ先のサジェビ薬水(水場)にも気づかず素通りした。]

「9時19分に頌徳樹のある1.6km地点に到着。遅い。メガネが曇るので立ち止まって何度となく拭く。昨日のテニスとオルム歩きの疲れが足にきた。最初の1km程は捗ったが、その後は、20m歩いては小休止というように、頻繁に立ち休みしていた。登山の前日は英気を養うべきだった。ザックは、用心してアイゼンなどの予備も詰め込んだので、9kg以上だろう。夏に登った時、何故にあんな高い(2m以上の手の届かない高さ)枝に赤いリボンが結んであるのか不思議に思ったが、今日謎が解けた。そのリボンは、頭の高さにある。積雪期の道しるべなのだ。樹木のない平地では、ポール先のリボンが結ばれていた。こんな小さな発見に何かしら感動していた。樹木は、凍てつき樹氷をなしていた。」

－立春の 漢拏の山に 雪を踏む 樹氷のトンネル 心洗わる－

9時45分に樹林帯を脱す。9時50分に2.3km地点を通過。残る2.4kmはほぼ平坦な雪道。

－雪原の 大王のごと 白鹿潭 遅々と歩み来 男女を 護る－

10時55分にウッセオルム待避所(有人、売店あり)に到着。周辺のオルムのウッセ、チャングモック、マンセトンサンなどが鮮明に見える。待避所前の野外形劇場のような板張り広場に50名程が屯。昼食は持参のサンドイッチは止めて、売店の温かいカップラーメン(1500ウオン)にした。うまい。11時30分下山へ。12時32分に頌徳樹を経由。

13時07分に登山口に到着。下りは1時間37分掛った。天気は良く、多くの登山者で踏み固められた雪の登山道は、無雪期よりも歩き易かった。運が良かったのだ。雪山登山、悔るべからずを肝に銘ずべし、ですよね。」



[2月の積雪期登山は、無雪期の登山とは大きく異なる。雪景に心を奪われて無雪期であれば気付くことも見逃してしまう。涸れ沢であるが10m幅のY溪谷やサジェビ薬水に気づかないという失敗を犯した。

頌徳樹は樹齢500年以上のミズナラの巨木で保護されている。この木にまつわる伝説は、昔凶作で飢饉になった折、この巨木の実を粥にして飢えを免れたことから、頌徳樹と頌されるようになったという。

Y溪谷を過ぎてサジェビトンサン手前まで1時間弱は急坂が続く。この間は、漢拏山の落葉広葉樹林帯である。サジェビトンサンの麓で樹林のトンネルから出る際、天気の良い日には蒼空の下に解き放たれたような気分になる。樹林帯を抜けると、200m程先にサジェビトンサンの水場がある。ここまでの1時間程の登高の苦勞を癒してくれる。この水場からウッセオルム待避所までは、緩慢な傾斜の石の多い道が続く。北方向にオルムの盟主格であるオスンセンオルムが眺められる。このコースの魅力は、無雪期よりも冬季、雪を冠した樹林のトンネルを通り、雪化粧をしたチョウセンシラビの樹林の景観を鑑賞することである。]

御里牧コースのコースタイム(距離:4.7km、登り所要時間:2時間)

御里牧広場登山口(標高970m)ー2.4km・1時間ーサジェビトンサン(標高1429m)ー0.8km・30分ーマンセトンサン(標高1606)ー1.5km・30分ーウッセオルム待避所(標高1700m)